

## ヨハネによる手紙第一2章7-11節 「兄弟を愛しなさい」

### 1A 新しい命令 7-8

1B すでに聞いているみことば 7

2B イエスにおける真理 8

### 2A 兄弟への愛 9-11

1B 闇の中にいる憎む者 9

2B つまずき 10-11

1C 光の中に留まる愛する者 10

2C どこへ行くか分からない憎む者 11

## 本文

ヨハネによる第一の手紙2章を開いてください、今晚は7節から11節まで見ていきたいと思えます。初めに、本文全体を読みます。「<sup>7</sup>愛する者たち。私があなたがたに書いているのは、新しい命令ではなく、あなたがたが初めから持っていた古い命令です。その古い命令とは、あなたがたがすでに聞いているみことばです。<sup>8</sup> 私は、それを新しい命令として、もう一度あなたがたに書いているのです。それはイエスにおいて真理であり、あなたがたにおいても真理です。闇が消え去り、まことの光がすでに輝いているからです。<sup>9</sup> 光の中にいると言いながら自分の兄弟を憎んでいる人は、今でもまだ闇の中にいるのです。<sup>10</sup> 自分の兄弟を愛している人は光の中にとどまり、その人のうちにはつまずきがありません。<sup>11</sup> しかし、自分の兄弟を憎んでいる人は闇の中にいて、闇の中を歩み、自分がどこへ行くのかが分かりません。闇が目を見えなくしたからです。」

前回私たちは、神の命令を守っているなら、神を知っているということが分かり、神のことばを守っているなら、神の愛が自分のうちに全うされている、というところを読みました。そして、神のうちに留まっていると言うなら、イエスが歩まれたように歩まなければいけないとも、ヨハネは言いました。そこで、ヨハネは、イエスご自身が神の戒めの中で最も大事だとされたものを取り上げられます。マタイ22章35-40節を読みます、「<sup>35</sup> そして彼らのうちの一人、律法の専門家がイエスを試そうとして尋ねた。<sup>36</sup> 「先生、律法の中でどの戒めが一番重要ですか。」<sup>37</sup> イエスは彼に言われた。「『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』<sup>38</sup> これが、重要な第一の戒めです。<sup>39</sup> 『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』という第二の戒めも、それと同じように重要です。<sup>40</sup> この二つの戒めに律法と預言者の全体がかかっているのです。」

ユダヤ教の中では、モーセの律法が<sup>613</sup> あると言われ<sup>1</sup>、その中でどれが最も大切なのか？と

<sup>1</sup> <https://ja.wikipedia.org/wiki/613%E3%81%AE%E3%83%9F%E3%83%84%E3%83%AF%E3%83%BC>

律法の専門家が聞きました。イエス様は、愛しなさいという戒めが最も重要だとされ、神を愛すること、次に隣人を愛することであるとしました。「戒め」というと、何か規則を守ること自体が目的になってしまうことがあります。けれども、それが目的なら「私は、これだけのことをしました。」と高慢になり、その高慢こそが神に忌み嫌われる罪であります。そうではなく、関係性なのです。ヨハネは、手紙の始めに、「1:3 私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。」と言っており、主との交わり、互いの交わりこそが目的で、その交わりのために神の命令があります。それで、ヨハネは神の命令を守れば、神を知っていることになるということを教えた後で、最も大切な戒めの一つである、兄弟を愛しなさいという戒めに焦点を合わせます。

## 1A 新しい命令 7-8

### 1B すでに聞いているみことば 7

**7 愛する者たち。私があなたがたに書いているのは、新しい命令ではなく、あなたがたが初めから持っていた古い命令です。その古い命令とは、あなたがたがすでに聞いているみことばです。**

ヨハネが、手紙を読んでいる信者たちを呼びかけています、「**愛する者たち。**」と言っています。兄弟を愛しなさいとこれから命じていくのですが、彼自身が手紙を書いている相手をこよなく愛していることが分かります。この前は 2 章冒頭で、「**私の子どもたち**」と呼びましたが、親愛を込めています。ヨハネの第二の手紙に、彼がいかに彼らを愛しているかを読むことができます。「1:1 長老から、選ばれた婦人とその子どもたちへ。私はあなたがたを本当に愛しています。私だけでなく、真理を知っている人々はみな、愛しています。」真理の中にいるからこそ、そこに真実の愛があるのだということです。

ヨハネは、これら書いていることは、「**古い命令**」だと言っています。愛しなさいという命令は、確かに古い命令です。イエス様が最も重要な戒めとして挙げたのは、モーセの律法である、レビ記 19 章 18 節でした、「あなたは復讐してはならない。あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。わたしは主である。」ここでヨハネは、グノーシス主義者を暗に批判しています。彼らは、「新しい知識」を誇ります。「あなたがたには、これらのことが知らされていなかったが、これこそが真理なのだ。」として、その新しい啓示だと言われるものに引き寄せるのです。

どうでしょうか、私たちキリスト教の世界で、自分が今まで知らなかったことを言う人がいて、それで既存の教会がいかにこういったことを教えず、人々を盲目の中においているのか、ということ強調している人たちがいつでもいます。こうした知識がなければ、あなたがたは正しく聖書を読んだことにはなりませんよ、とか。こうした考えの行き着くところは、異端です。本当に大事なことは、古い命令にあります。それは色あせてもう効力がないように見えるかもしれませんが、いいえ、そのありきたりの命令こそが、今の過ぎゆく世の流れにおいて、真新しい御霊の風となるのです。

そしてヨハネがここで言及している一言が、意外かもしれません。「その古い命令とは、あなたがたがすでに聞いているみことばです。」であります。イエス・キリストを信じた時に既に、聞いている命令だということです。それが、互いに愛し合いなさいということであります。今日、イエス・キリストを信じる信仰があつて、付け足しのように「兄弟たちの交わりは大事です、教会は大事です。」となつてしまつてはいないか？と心配です。信仰を持って間もない時にすでに、互いに愛し合うことが教えられていないとおかしいということです。

パウロはテサロニケに行って、そこで福音を伝えて、みことばを教えるも、命の危険があつて逃げました。そんな滞在していなかったのですが、彼らは信じるということだけでなく、「1:3 愛から生まれた労苦、私たちの主イエス・キリストにある望みに支えられた忍耐」が特徴でした。「4:9 兄弟愛については、あなたがたに書き送る必要がありません。あなたがたこそ、互いに愛し合うことを神から教えられた人たちで」と言っています。ペテロも第二の手紙で、信仰から愛に至る熱意を傾けることを教えています。「1:5-7 だからこそ、あなたがたはあらゆる熱意を傾けて、信仰には徳を、徳には知識を、知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には敬虔を、敬虔には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい。」

## 2B イエスにおける真理 8

<sup>8</sup> 私は、それを新しい命令として、もう一度あなたがたに書いているのです。それはイエスにおいて真理であり、あなたがたにおいても真理です。闇が消え去り、まことの光がすでに輝いているからです。

「新しい命令として」ヨハネが書いていますが、イエス様がそのことを最後の晩餐の席で行われました。「ヨハネ 13:34 わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」ここで主が語られている「新しい」とは、時間的に新しいということではありません。後で出された命令ではなく、古くからある命令なのです。ここでの「新しい」は、性質における新しさです。新しいバージョン、ということです。主は、互いに愛し合いなさいという命令において、「わたしがあなたがたを愛したように」と言われています。主が弟子たちを公生涯の間、こよなく愛されて、最後の晩餐では、彼らの汚れた足を洗われました。この方は、彼らの益になることを考えて、神に仕えておられました。そして、ご自分のいのちをお捨てになりました。この愛に応答して、互いに愛し合いなさいと命じられたのです。つまり、イエス様から愛された経験を持っている者たちだからこそ愛し合える仲なのです。ヨハネは第一の手紙で、そのことをさらに詳しく書きます。「4:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」自分が神を愛して、愛されるものではありません。そうではなく、まず神が愛されて、御子を宥めのささげ物として遣わされたのです。ここに愛があつて、その応答として互いに愛します。

そして、「それはイエスにおいて真理であり」とヨハネは言っています。ここの「真理」は、今の日本語で英語のカタカナ語になっているのが、語感が良く出ているでしょう、「リアル」です。主において、愛するということは、何か遠く of 概念のようなものではなく、リアルでした。罪人に対してリアルでした。姦淫の現場で捕らえられた女に対して、わたしも罪に定めない、もう罪を犯してはならないと言われて、彼女が真実な意味で立ち返るようにされました。また悔い改める取税人や他の罪人と共に食事をされました。弟子たちに対して愛を示されました。あれだけのわからずやで、ご自分が苦しいのに、全く理解が出来ず、主の右の座、左の座に着くのは誰かと言い争っていたのに、それでもあきらめませんでした。パリサイ人たちにさえ、愛を示されました。「災いだ」という激しい言葉をかけられましたが、それは、彼らの心が頑なさのゆえであり、それに対する悲しみのゆえに嘆きであり、彼らが立ち返ってくれたらどれほどうれしいことか、という期待があるからです。

そして、「あなたがたにおいても真理です。」と言っています。ここは、「イエス、また、あなたがたにおいて真理であり」としかなっていません。つまり、ここで主ご自身と私たちが交わりを持っていて、この方にある真理は、私たちにも真理なのだということです。

そして、「闇が消え去り、まことの光がすでに輝いているからです。」とヨハネは言っています。ヨハネの福音書でもこう語っていました。「1:5 光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。」福音書において、主がまだ来られるまでは、これらは終わりの日に主が来られて実現する約束として捉えていました。イザヤが預言して、こう言いました。「9:2 闇の中を歩んでいた民は、大きな光を見る。死の陰の地に住んでいた者たちの上に、光が輝く。」しかし、主が来られて彼らは光を見ました。そのリアルに触れて行ったのです。そして、十字架での死と、三日目のよみがえりを目撃して、彼らにとって現実そのものとなったのです。

## 2A 兄弟への愛 9-11

### 1B 闇の中にいる憎む者 9

<sup>9</sup>光の中にいると言いながら自分の兄弟を憎んでいる人は、今でもまだ闇の中にいるのです。

ヨハネは、第一の手紙の中で何度となくやっている、信仰の検証をしています。「言っている」とことと、実際に行っていることの違いです。私たちは、言っていることでその実質を計ってしまう傾向があります。キリスト者として私はこう思いますと、教科書的なことを言っている人は、きちんとしたクリスチャンで、そうでない人はきちんとしていないと思われてしまいます。けれども、教科書的なことを言っている人が、キリストのうちに歩んでいるとはとても思えない、真逆なことをしていることがあります。「言いながら、こうしている人」という問題をヨハネは取り上げます。

具体的には、ここではグノーシス主義者です。彼らは、自分たちには新しい知識が与えられ、光を受けていると主張します。つまり、光の中にいると言っているのです。ところが、彼らは、既存の

教会にいることはできないとして、仲間から離れ、出て行ってしまいます。ヨハネは、「2:19 彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。」と書いています。私たちは、離れること、出て行くことが、どうして「兄弟を憎んでいる」ということになるのか分からないかもしれませんが、それは「憎む」の意味が激しい感情の込めたものだけに限定してしまうからです。マザー・テレサは「愛の反対は無関心」という言葉を言ったと言われていますが、関係を断ち切る、離れるということの裏には、その人と自分は一緒ではない、あなたは闇の中にいて、私たちは光の中にいる、というような高慢とうぬぼれ、また相手に対する見下しがあります。これこそが、憎しみであります。

このことが、キリスト教会の中で大きな偽りの一つとしてまかり通っています。だからこそ、使徒ヨハネは、警告を発したのでしょう。自分は光の中にいると思っています。自分こそが正しいと思っています。その正しさに同意しない人がいると、「私は愛していますよ」と口では言います。けれども、言葉の節々に、その人の評価を下げるようなことを語ります。「もっと愛すべきなのですができません。」とか言い訳をします。「あのクリスチャンのことは、嫌いです。」とはっきり言いませんね。クリスチャンは愛し合いなさいと言われていてから、はっきりと言えません。それで自分自身を偽り、相手を偽って、上手に相手を引き下げたり、自分を仲間から引き離したりするのです。

ヨハネはこのことについて、はっきりと、「今でもまだ闇の中にいるのです」と言っているのです。もう光が来たのに、まだ闇の中にいます。戦後何十年もたって、サイパンなどの島で戦っている日本兵が何人か出てきましたが、そのようなことになってしまっていて、キリストの時代に入っているのに、未だ暗闇の中を歩んでいるという時代錯誤に生きているのです。そもそも、憎しみのあるところから救われたのが、キリスト者のはずです。「テトス 3:3-5 私たちも以前は、愚かで、不従順で、迷っていた者であり、いろいろな欲望と快樂の奴隷になり、悪意とねたみのうちに生活し、人から憎まれ、互いに憎み合う者でした。しかし、私たちの救い主である神のいつくしみと人に対する愛が現れたとき、神は、私たちが行った義のわざによってではなく、ご自分のあわれみによって、聖霊による再生と刷新の洗いをもって、私たちを救ってくださいました。」ですから、憎しんでいるということは、未だ救われていない人と同じになっているのだよ、ということです。

## 2B つまずき 10-11

### 1C 光の中に留まる愛する者 10

<sup>10</sup> 自分の兄弟を愛している人は光の中にとどまり、その人のうちにはつまずきがありません。

ヨハネは、兄弟を愛しているということが光の中にいることの印であることを、はっきりと述べています。私たちは、「1:7 もし私たちが、神が光の中におられるように、光の中を歩んでいるなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。」と読みました。ここを読んだ時に、神と自分との交わりとだけ考えていたかもしれません。けれども、ここで見



るように、神との交わりの中に、互いの交わりもあり、兄弟を愛しているということが、光の中にいて、神と交わっているということを教えているのです。神と交わっていることと、互いに交わることは切っても切り離せない関係にあります。神を愛していると言いながら、兄弟を憎むことはできず、神を愛している人は兄弟も愛するのです。

愛するって、どういうことなのでしょう？ヨハネ 13 章を学んだ時に学びましたが、具体的に仕えること、実際的なことです。ヨハネは第一の手紙では、「3:17 この世の財をもちながら、自分の兄弟が困っているのを見ても、その人に対してあわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょうか。」とあります。とても具体的であり、実際的です。

使徒たちの手紙には、数多く「互いに」という命令があります。「ロマ 12:10 兄弟愛をもって互いに愛し合い、互いに相手をすぐれた者として尊敬し合いなさい。」「12:16 互いに一つ心になり、思い上がることなく、むしろ身分の低い人たちと交わりなさい。」「14:13 こういうわけで、私たちはもう互いにさばき合わないようにしましょう。」「15:7 ですから、神の栄光のために、キリストがあなたがたを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに受け入れ合いなさい。」「15:14 私の兄弟たちよ。あなたがた自身、善意にあふれ、あらゆる知識に満たされ、互いに訓戒し合うことができると、この私も確信しています。」「I テサ 5:11 ですからあなたがたは、現に行っているとおりに、互いに励まし合い、互いを高め合いなさい。」「ガラ 6:2 互いの重荷を負い合いなさい。そうすれば、キリストの律法を成就することになります。」「ヤコブ 5:16 ですから、あなたがたは癒やされるために、互いに罪を言い表し、互いのために祈りなさい。」「I ペテ 4:9 不平を言わないで、互いにもてなし合いなさい。」こうやって、具体的に忍耐をもって愛を行っていきます。

そうすると、「**つまずきがありません**」とヨハネはいいます。光の中に歩めば、見えていますからつまずきません。暗ければ、つまずいてしまいます。つまずきとは、霊的には、罪を犯したり、信仰から離れてしまうことを意味します。兄弟を愛しているということによって、自分自身を光の中に保ち、罪を犯すというつまずき、信仰から離れてしまうというつまずきから守られる、ということなのです。私たちは、自分の信仰が守られるために、罪を犯さないように、祈りましょう、聖書を読みましょう、という言葉はよく聞きます。それだけではないのです、具体的に兄弟を愛しているということで、神の愛の中に自分自身を保っているという効果があるのです。

愛するということは、神を第一にしていなければできないことです。自分を否定しなければできないことです。自分を無にしないとできないことです。相手の益を考えなければできません。自分を第一に持って行く時に、他の兄弟に愛のないことをするし、結局は他の罪も犯していく温床となっていくます。どれだけ私たちが互いに必要なかが分かります。キリストの愛に結ばれて一つになっていることが、私たち自身を守るかが分かります。

## 2C どこへ行くか分からない憎む者 11

**11** しかし、自分の兄弟を憎んでいる人は闇の中において、闇の中を歩み、自分がどこへ行くのかが分かりません。闇が目が見えなくしたからです。

兄弟を愛している人は光の中にいるのとは対照的に、憎む人は闇の中にいます。闇の中にいるだけではなく、闇の中を歩みます。そして、自分がどこへ行くのか分からずにいます。目が見えないままなのです。自分は見えていると思っていますが、見えなくされていることに気づきません。イエス様が、生まれつきの盲人を治されて、彼がイエス様を礼拝した後に、イエス様は言われました。「ヨハ 9:39 わたしはさばきのためにこの世に来ました。目の見えない者が見えるようになり、見える者が盲目となるためです。」パリサイ人が尋ねました。「9:40 私たちも盲目なのですか。」イエスは彼らに言われました。「9:41 もしあなたがたが盲目であったなら、あなたがたに罪はなかったでしょう。しかし、今、『私たちは見える』と言っているのですから、あなたがたの罪は残ります。」見えていると言っているけれども、見えていません。それで彼らは何をやったか？神に仕えていると思いつつ、憎しみを増幅させ、イエス様を十字架に付けるところまで持って行ったのです。そのような気配が見えそうになっていた時に、なるべくユダヤ人の何人かでも光の中に留まるように、以下のように警告されました。「ヨハ 12:35 もうしばらく、光はあなたがたの間にあります。闇があなたがたを襲うことがないように、あなたがたは光があるうちに歩きなさい。闇の中を歩く者は、自分がどこに行くのか分かりません。」

箴言には、光の中を歩む人と暗闇を歩む人を対比しています。「4:18-19 正しい人の進む道は、あけぼのの光のようだ。いよいよ輝きを増して真昼となる。悪しき者の道は暗闇のよう。彼らは何につまずくかを知らない。」兄弟愛の中にいれば、ますます光の輝きを増します。憎めば、自分がどこに行っているのか分からなくなります。

憎しみは人を見えなくさせます。今は、いかに人を憎む文化の中にいるか知れません。人を尊ぶことがないがしろにされます。いくらでも非難や中傷をしてもよいと思っています。また、恨むことはよいことであるかのようにします。被害者意識は美德とされています。イエス様は正反対の生き方をされたことを覚えてください。ご自分を罵る者たちに対して、「彼らの罪を赦してください」と言われたのです。ご自分を悲劇のヒーローあるいはヒロインにしなかったのです。そうやって、自分を暗闇の中に置くことがないように。福音の中に生きているつもりが、パリサイ人たちと同じような憎しみの中に生き、そして憎んでいるということさえ気づかないようなところに自分を置くことがないように、祈ります。